

びわこの 考湖学

前々回も触れましたが、『万葉集』に「八十の湊に」なごとうたわれていることに気づきます。一つように、琵琶湖には古代以来、現在の滋賀県大津市に「大津」の港がありまして、現在の福岡県福岡市にある「筑紫大津」です。

とはいえ、すべてが同じような役割、重要性を担っていたわけではありませぬ。今回は、古代の「大津」についてみることにしましょう。

まず、現在「大津」の名が付く地名は、大津町(大阪府泉大津市、徳島県鳴門市、熊本県菊池郡など)、大津区(兵庫県姫路市)、大津(神奈川県横須賀市)、大津郡(山口県に2005年まで存在していた)などがあります。電車の駅名にも9カ所ほどあります。いずれもが、港であったことによる名称です。

次に、古代の記録をさぐると向かう際には、筑紫大津へ

から船出をしたのです。では、琵琶湖の大津はどのような港であったのでしょうか。

半島・大陸からは筑紫大津經由難波津の瀬戸内海ルートではなく、日本海を東に向かって越前や能登

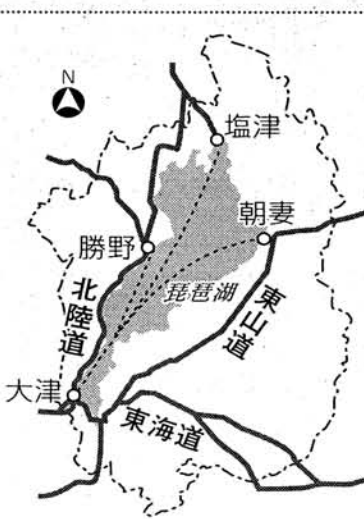
琵琶湖を運ぶ港、大津の役割、眺めると大津の港、眺めると大津の港、眺めると大津の港



「大津」と水運

などで上陸し琵琶湖を經由する日本海ルートもあったのです。神亀4(727)年から延長7(929)年にかけて30回を超える往来があった渤海使および遣渤海使はこのルートを用いて

また、570年と573年に高句麗の使者が越前に漂着した事例があることから、彼らも日本海ルートをういていたと考えられます。平安時代には唐や新羅の人々が日本海側に漂着し



北陸道諸国や東国の物資が琵琶湖を經由して、大津に集中した

以上のことから、当時の日本にとっての国際的な航路としては、玄界灘↓筑紫大津↓瀬戸内海↓難波津と、日本海↓越前↓琵琶湖↓大津の二つがあり、国内の貢納物輸送に関しても、おびただしい量の物資が大津で陸揚げされていたことがわかります。つまり、都からみた瀬戸内海ルートの最後の港が難波津で、日本海ルートの最後の港が大津であったのです。

このようにみても、なぜ大津に「通訳」が居住する必要があったのか、なぜ大津に宮が置かれるようになったのかが理解できます。琵琶湖には「湊は八十あり」といえども、日本海ルート終着点にして最大の港は、「大津」であったのです。

(滋賀県文化財保護協会 畑中英二)

交易日本海ルートの終着点